

解答

- ① 問1 イ 問2 1 位置 ② 中心都市 ア(くんで) 2 輪作
 問3 1 酪農 2 エ 問4 1 オホーツク 2 ウ
 ② 問1 信濃 問2 ウ 問3 消雪 問4 1 エ 2 イ 問5 ア
 ③ 問1 高松 問2 ため池 問3 ア 問4 ウ 問5 ウ
 問6 かんがい 問7 イ 問8 1 ことば 促成 記号 ア(くんで) 2 エ

解説

- ① 北海道の十勝平野^{とがち}についての問題です。

問1 ピーマンは高知平野などでさかんに栽培^{さいばい}されています。

問2 1 那覇市^{なは}は沖縄県^{おきなわ}の県庁所在地^{けんちやうしよざいち}、札幌市^{さっぽろ}は北海道の道庁所在地^{だちやうしよざいち}です。

2 同じ作物を同じ畑^{つづ}で続けて栽培^{さいばい}すると栄養分^{えいようぶん}がすいとられるため、作物が育ちにくくなります。

このような連作障害^{れんさくしやうがい}を防ぐために、畑を区切^{ふせ}って、植える作物の種類^{しゆるい}を年ごとにかえていく輪作^{りんさく}が行われています。(→『考える社会科地図』p.84②)

問3 2 エ:冬の間、牛が食べるえさをつくる建物^{たても}をサイロ^{げんざい}といいます。現在は、多くの農家がサイロを使わず、かりとった牧草^{ぼくそう}を丸くかためビニールで包^{つつ}んでいます。これはロールベールサイレージとよばれています。

問4 2 流水の下は栄養分が多いため、プランクトンがよく育ち、多くの魚が集まってきます。また、流水が来ている間は、港は流水でとざされてしまうため、漁^{りよう}はできません。

- ② 新潟県^{にいがた}の十日町市^{としかまち}についての問題です。

問1 信濃^{しなの}は長野県の昔の国の名で、信濃国から流れてくる川という意味です。長野県内では千曲川^{ちくまがわ}とよばれ、新潟県に入ると信濃川^{しなの}という名に変わります。

問2 大陸から吹く冷たくかわいた北西の季節風^{きせつふう}と、日本海を流れる暖流^{だんにゅう}の対馬海流^{つしま}などの影響^{えいきやう}で、日本海側^{がわ}に多くの雪^{ゆき}が降ります。

問4 1 給水タンク^{きゆうすい}は、沖縄などで水不足^{みずぶそく}に備えて屋根^{まな}の上に取りつけられていることがあります。

問5 イ:車の前についている歯車^{じせつ}のようなものを使って道路の除雪^{じよせつ}を行うのは、ロータリー車^{ろたーりしや}です。
 ウ:雪国では、信号機^{しんごうき}に積もる雪^{ゆき}の量を^{りよう}少しでも減らして軽くするために、たて型の信号機^{がた}が使われているところがあります。エ:かんじきは、雪の深いところを歩いたり、雪おろしをしたりするときなどに、靴^{くつ}に結びつけて使う道具^{もぐ}です。

- ③ 香川県^{かがわ}と高知県^{たかち}についての問題です。

問4 讃岐平野^{さぬき}がある香川県^{かがわ}は瀬戸内海^{せとないかい}に面している県で、かつて塩づくりがさかんでした。現在は工場^{こうじやう}でつくられたり外国から安く輸入^{ゆにゅう}されたりするようになり、塩づくりは行われなくなりました。小麦^{せいさんりやう}の生産量^{もつと}が最も多いのは北海道です。

問7 イ:香川用水^{すいげん}の水源^{すいげん}となっているのは、高知県の早明浦^{さめうら}ダムです。

問8 2 促成栽培^{そくせい}によってつくられた野菜^{やさい}は、新鮮^{しんせん}さを保つために保冷装置^{ほれいそうち}のついたトラックを使い、四国^{むす}と本州^{ほんしゆ}を結ぶ橋^{おおさか}をわたって、東京や大阪などへ運ばれます。

② 出典は、後藤 竜二「天使で大地はいっぱいだ」〈講談社〉。

問一 「『こら～なんの用だ。』～ぼくらを～にらみつけた」(10～13行め)という「中学生たち」の言動に注目して、「中学生たち」が「ぼくら」に取った態度にあう表現を選びます。2 「帰ろう。」(27行め)と「アオのうでをひっぱった」(28行め) ぼくの言動によって、「アオ」と「中学生たち」が、どのように感じたか、考えてみましょう。小学生である「ぼく」が、「目つきのわるい」(12行め)中学生たちに歯向かうような態度を取ったことに、「アオも中学生たちも」“おどろいて”いるのですね。

問三 傍線部の前後に注目し、「ぼくら」がなにを「わらった」のか、考えます。「こら、ちびども、キンギョのふんみたいになんの用だ。」(10・11行め)、「ちび、ひっこんでろ、ちび。」(33行め)と、「ぼくら」をさんざん「ちび」よばわりし、見くびっていた「中学生たち」でしたが、「中学生より十センチほど背が高」(39・40行め)い「ジックが～横にひょいと立」(34・35行め)つと、「『な、なにしやがる!』中学生たちは、びくっとして、こぶしをかためて身がまえ」(36～38行め)ます。ジックは、ただ「横にひょいと立った」だけなのに、いばりちらしていた今までの態度とはうって変わって、おびえたような様子を中学生たちが見せたことを、「ぼくら」はわらったのですね。

問四 「ちえっ。」は、ものごとが思いどおりにいかないときや、予期に反して残念なとき、いまいまして思う気持ちが表れた言葉です。「ぼく」をそのような気持ちにさせることがらを直前部に注目して考えます。「中学生たち」が「アオ」を「とりかこん」(5行め)だのは、「アオ」に「はねをひっかけ」(47・48行め)られ、腹を立てたからでした。けれど、どろはねがかかるなんてことは、「雪どけのあとじゃよくあること」(49・50行め)じゃないか、と、どろはねくらいのことでは腹を立てている「中学生たち」にあきれる気持ちが、「思わず」「ぼく」の口をついて出てしまったのです。

問五 「ぼく」は、どろはねくらいで腹を立てている「中学生たち」にあきれています。その上、「やい、ちび、なめんじゃないよ。え、ちび、さっさと帰りな～どうなんだ、ちび——。」(54～56行め)と、何度も「ちび」よばわりされたことに「頭にき」(58行め)て、「中学生たち」を見返す作戦を思いつきます。「中学生たち」に「どろ水を頭からかぶ」(64行め)せて、逃げるのです。うまく中学生から逃げおおせ、「もう安心だと思ったあたり」(76・77行め)で、やっとほっとし、そして、まんまと作戦がうまくいって、「中学生たち」が「まともにとろ水を頭からかぶって、赤んぼうみみたいな悲鳴をあげた」(64・65行め)ことを思い返すと、なんともゆかいな気持ちになったのですね。

問六 傍線部をふくむ一文に注目すると、「いっそうわらった」原因は、「それ」(81行め)を見たことだとわかります。「それ」の内容を直前部から考えると、あの、「あんまりだれともつきあわないで、青い顔で勉強ばかりして」(24・25行め)いるアオまでが、「からだをよじらせてわらって」(80・81行め)いて、さらに痛快な気分になったからだと考えられますね。

問七 アオ…「中学生たち」に「とりかこ」(5行め)まれているときの「まっさおな顔」(15行め)や「いまにもふるえだしそう」(43行め)な様子から「おくびょう」であることがわかります。また、いかにも柄の悪い「中学生たちにはねをひっかけ」(47・48行め)てしまったり、「ぼく」の「まばたき」(60行め)の合図に気づかずに、どろ水をかぶってしまったり、果ては、「どろんこ道の走りかたも知らない」(83行め)でどろはねを「首すじあたりにまで点々とつ」(84行め)けてしまったりと、「ようりょうが悪い」ことがわかります。ぼく…ささいな理由で「中学生たち」が「ひとりの小学生」(4行め)をいじめていることや、「ちび」とくりかえしいわれたことが「頭にき」(58行め)て、「目つきのわるい」(12行め)、自分より大きな「中学生たち」を相手に、「アオ」を守り、「中学生たち」を見返す作戦まで実行する姿にふさわしい人物像を選びます。